

## 〔課題演習抄録〕

# 説明的文章の読みに必然性を持たせられるか - 動機づけの理論に着目して -

近 藤 佑 紀

Yuki KONDO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：説明的文章，動機づけ，学ぶ意欲，TARGET 構造，状況意欲

## 1 研究の目的

本研究の目的は、説明的文章の読みの指導で、学ぶ意欲を持てる指導方法の検討である。

従来の説明的文章の読みの指導過程について、吉川(2002)は、「文章の要素分析学的な学習活動が中核であり、嫌われた指導過程」であると述べている。つまり現状の説明的文章の読みの指導では、意欲的に読むことが難しいと考えられる。

そこで筆者は、説明的文章の読みの指導における子どもの意欲的な学びを実現する上で、学習意欲の視点を組み込んだ指導方法を構想した。

## 2 研究の計画

「動機づけの期待×価値モデル」を基に、内発的に動機づけられた学習活動に子どもを参加させるTARGET 構造に着目し、授業を分析・考察する。

## 3 研究の内容

### (1) 先行研究

田中・高垣(2013)は、TARGET 構造を用いた実践で、日米の教育環境の違いから【課題】【権威】【グループピング】【振り返り】に絞るべきと指摘する。

### (2) 実践授業

#### ①実践授業Ⅰ

1)実施日：平成30年7月18日（水）

2)福岡県内小学校4年生

3)単元名：ヤドカリとイソギンチャク

4)主眼：ヤドカリがイソギンチャクを付けている理由を、第3段落から第6段落を読むことで、イソ

ギンチャクの性質、イソギンチャクの行動から捉えることができるようにする。実践授業Ⅰでは、【課題】に焦点を当てて授業を構想した。（以下、TARGET 構造の具体については、【】をつけて示す。）

#### 5)成果と課題

本時の学習課題を子どもの生活経験と結びつけることで、課題意識が深まったことである。具体的には、本時の学習課題「どうしてヤドカリは、イソギンチャクをつけているのか」に対し、「あなたたちは、ランドセルを背負っているときとそうでないときは、どちらが動きやすいですか」と発問したところ、「動きにくいのにどうしてつけているんだろう」という反応が返ってきた。このことは、【課題】においても指摘されており、生活経験と結びつけることの重要性が分かる。

課題としては、本来10時間単元を5時間単元として圧縮したため、進度が早く子どもの理解が追いつかないまま、授業を進めてしまうことがあった。そのため課題意識を持てても、【課題】に焦点を当てるだけでは、意欲的な学びの持続が難しいことが考えられる。

#### ②実践授業Ⅱ

1)実施日：平成30年11月7日（水）

2)福岡県内小学校4年生

3)単元名：アップとルーズで伝える

4)主眼：第4段落と第5段落を読むことで、アップとルーズのそれぞれの分からないことを、分かることが補完している関係であることを捉えることができるようにする。

実践授業Ⅰの反省を基に、【課題】以外の構造を踏まえ、授業を構想した。また田中・高垣(2013)を基に、【課題】【権威】【グループピング】【振り返り】に焦点を当てて、授業を構想した。そして以

下の表のように、まとめた。

学習場面	TARGET 構造に基づく留意点	留意点に基づいたチェック項目
導入	課題設定：生徒が興味や疑問を引き出す【課題】【権威】経験や背景と関連付けられる課題であること【課題】	課題設定：子どもの経験や背景と関連付け、興味や疑問を基にした課題となっていること。(学習の目的)
展開 1	学習活動：自分の経験や背景と関連付け、学ぶ内容に価値が見いだせること【課題】【権威】協働的な活動であること【グループベイング】	展開 1 の学習活動：筆者の主張を理解する。→筆者の意見を抜き出し、文章の内容を検討する際、文章の内容を子どもが追体験することで、筆者の主張に学ぶ価値を見出す。
展開 2	知識・技能の認識・理解のフィードバックを行う機会があること【振り返り】	展開 2 の学習活動：筆者の主張の妥当性を検討する。→認識している筆者の主張が、妥当なのか推論しながら検討する。
まとめ	知識・技能の認識・理解のフィードバックを行う機会があること【振り返り】	学習の目的(アップとルーズにはどのような違いがあるのか)に対して、学習内容(違い)を説明できる。

#### 5) 成果と課題

展開 1 で、本文の内容理解のため、本文を追体験を行うことを意識した。以下 TC 記録である。

T	C
<ul style="list-style-type: none"> <li>例えばみんなこの選手と同じチームだったらどう思いますか。ゴールを決めたシーン。【課題】</li> <li>じゃみんながこのチームを応援してたとして。ゴールを決めました【課題】</li> <li>このアップの写真で分かりますか。</li> <li>結局アップで分かることってどういうことですか。</li> <li>よく分からないのが？</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>イエーイ</li> <li>イエーイ</li> <li>うーん。わからない。</li> <li>細かいことがよく分かる。</li> <li>うつされていない多くの部分の事</li> </ul>

ここでは、【課題】【権威】を意識し、アップの写

真では、細かい様子は伝わるが、チームメイト・サポーターの様子が伝わらないことを捉えられることをねらった。アップの写真を見ながら追体験をして、体験したことが伝わるかを問うことで、内容理解が深まったと考えられる。

また展開 1 でアップとルーズで分かること・分からないことを表でまとめている。そして展開 2 で、本文と異なるアップとルーズの写真を提示し、本文の内容の【振り返り】という活動を行った。以下は、その場面の TC 記録の一部分である。

T	C
・アップでは結局どういことが分からないのですか。【振り返り】	・周りのうつされていない多くの部分。この写真では、木とか周りにあるものが分かりません。

このことは、アップとルーズの写真を比較し、アップの写真で分からない情報を本文の「走っている選手以外の、うつされていない多くの部分のことは、アップでは分かりません。」と対応させていたと考えられる。そのため子どもは、本文を振り返って読むことで、展開 2 における筆者の主張に妥当性を持つことができたと考えられる。

## 4 成果と課題

本研究の成果は、3 つある。第 1 に【課題】【権威】を基に、課題設定を行うことで、子どもの疑問を基に解決すべき課題となることである。第 2 に【課題】を基に、本文の記述内容を追体験する活動を取り入れ、本文と関連付けることで、文章理解が深まることである。第 3 に【振り返り】は、筆者の主張の妥当性を検討できることを明らかにした。

一方、課題は【権威】と他の構造との関連を十分に検討できなかった。また【権威】を意識することで、子どもの課題になったり、協働的な活動になったりと授業改善全般につながると考えられる。

## 主な引用・参考文献

- 鹿毛雅治 2008 学習意欲の構造から見た学校が取りうる方策 - 「状況意欲」に着目して教育環境のデザインを - BERD No.13 ベネッセ教育総合研究所
- 吉川芳則 2002 小学校説明的文章の学習指導課程をつくる 明治図書出版
- 田中俊也・高垣マユミ 2013 科学的思考の「気づき」を促す協同的学びの効果 日本科学教育学会年會論文集